

**龍谷大学世界仏教文化研究センター**  
**2016年度臨床宗教師特別講義**

講演名	臨床宗教師の立ち位置—成立宗教と民間信仰—
開催日時	2016年6月6日(月) 10:45~12:15
場所	龍谷大学 大宮学舎 清風館 B101 教室
講演者	鈴木岩弓先生(東北大学大学院教授)
司会	鍋島直樹先生(龍谷大学 文学部教授)
主催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 応用研究部門
共催	龍谷大学実践真宗学研究科
参加人数	55人

**【講義の概要】**

1. 東北大震災時の「死」から超宗派超宗教的活動へ
2. 「宗教」と「信仰」の違い
3. 民間信仰とは何か
4. 霊場恐山の風景と近年の動向
5. 宗教者の立ち位置

**【講義のポイント】**

■ 東北大震災時の「死」から超宗派超宗教的活動へ

災害によりもたらされた「死」は突然死であり段階的な死ではない。「死」に対する準備が不足しており、残された者にとっても死に行くものにとっても心残りや悔いが残る。特に生き残った被災者の負い目は深く、グリーフケアが必要であった。そこで宗教者たちが自発的に読経ボランティア、宗教ボランティア(心の相談室)や電話相談等の活動を行うようになったが、そこで生じたのは宗教者たち自身の関わり方への疑問である。宗教者による布教ではない被災者支援の必要性和困難さがそこにあり、一つの宗派や教団によるものではなく、超宗派超宗教的活動の実現に向けた理論・実践方法の確立が必要であった。そうした課題の元に設置されたのが東北大学の「実践宗教学寄附講座」である。

今回は、異宗派異教徒の信仰現場に立つ宗教者の立場を宗教民族学的視点から考察する。

■ 「宗教」と「信仰」の違い

日本人は無宗教かということ、決してそうではなく、現在の日本人の葬式のほとんどが仏式で行われている。しかし日本人は自分を仏教徒と考えているというよりは、葬式を仏式で行うことはむしろ習俗であると言える。また、墓参りに行く人もとても多く、そうした行為は宗教というよりも習俗、あるいは習慣と捉えることができるだろう。しかしそのような行為の背景には死後の靈魂の存在を認める観念があり、まさに「信仰」に根ざす行為であると言える。なお、死後の靈魂を信じている。日本人は多いが、信じないという人も常に2割から3割いることも重要である。

「宗教」と「信仰」の違いを考えた場合、宗教は組織化されたものであると言える。ここでは教祖や教義・教団が明確に存在し、組織性が重視される。つまり組織的な観念＋行為が集団レベルで行われるのは宗教である。一方、信仰は、教祖が不明確であり、教義・教団が非組織的であり、そうした非組織のうちに観念＋行為が個人レベルにおいてなされる。宗教と信仰とは、同じ枠に入るが組織性のレベルにおいてその立ち位置が異なるのである。

### ■ 民間信仰とは何か

かつて堀一郎は『民間信仰』（岩波書店,1951:v）において、宗教民族学を民間信仰の研究であると指摘している。この「民間信仰」という語は和製の造語であり、姉崎正治が制作したものである。姉崎における宗教は、正統宗教が上にありつつ、民間にまたは自ら多少正統の組織宗教からは特立した信仰習慣を有するものと捉えている（姉崎「中奥の民間信仰」『哲学雑誌』130,1987年）。

姉崎の考える民間信仰とは、原始宗教の残存 survivals であり、自主的な animism 的信仰である。つまり組織宗教の変化・曲解・混淆であり、組織宗教がない世界に民間信仰は存在しないのである。組織宗教（成立宗教）が変化して民間信仰が生まれるのであって、組織宗教でないものが民間信仰なのではない。日本の宗教は、各教団宗派それぞれの教義をもつ「宗教」と、それが変化、曲解・混淆した、一般庶民による民族レベルの宗教、即ち民間信仰の二つによって構成されている。

### ■ 霊場恐山の風景と近年の動向

霊場恐山は、曹洞宗中心の第一地区と民間信仰中心の第二地区に分けることができる。その恐山における禁煙の変化としてまず挙げられるのが、極楽浜の「即席祭壇」である。極楽浜は宇曽根湖畔の白砂の浜辺だが、そこに近年、個人的に工夫を凝らした祭壇を作ることが流行している。その形態は、単に砂山を作ったものに、小枝や俗名を書いた小石、戒名を書いた割り箸や紙を添えたものである。このように、死者の抛り所として「即席祭壇」が作られており、供養大正の具象化/文字化がなされ、死者は抽象的なものから具体的な死者へと移行しているのである。

さらに地獄めぐりにおける積み石が墓標へと変化し、山内の自然石の積み石へ俗名や戒名を彫りつけたもの、山外の自然石の積み石へ俗名や戒名をペン書きしたものだけでなく、石板を使用して俗名や戒名を彫りつけ、さらにはそれをセメントで固定したものなども現れている。

こうした新たな動向の特質は、死者の抛り代が自然物から人造物へ変化し、「具体的死者」の抛り代としての固有名詞の保存化、霊場内への恒常的施設の設置をして地表の一点を占有するといった傾向が挙げられる。ここでは霊場・恐山の霊園化が信仰しているのである。そしてその変化の原動力となっているのが、他の参詣者の行動様式の模倣であり、仏教教義の変化・曲解・混淆である。ここで行われている行為は仏教的な教義を変化させたものであり、仏教の民族化/民族の仏教化として捉えることができるだろう。

### ■ 宗教者の立ち位置

信仰とはヒトとカミとの交渉である。カミに対する信念とそれに基づくヒトの行為によって、つまり行為を手がかりに他者の信念が把握可能となる。信仰や宗教はカミだけでは不成立であり必ずヒトが関与するものである。

国立民俗学博物館初代館長・梅棹忠雄は日本人の心の中のカミのあり方を説明する際、神道や仏教、キリスト教などの完結した倫理をメーカーと呼び、ヒトがそれらを時に応じて使用するユーザーとし、僧侶や神主だ~~ら~~などの宗教者をディーラーと呼んだ（梅棹忠雄、多田道太郎『論集・日本文化 日本文化と世界』講談社現代新書、1972年）。信仰の現場とは、そうした宗教、信仰を持つ同一個人の中なかでも闘ぎあっているものであり、經典的信仰と経験的信仰の中なかで揺れ動いているものである。

宗教的ケアやスピリチュアルケアといった現場は民間信仰なども含めたダイナミズムの中なかで把握する必要がある。そこで大事なものは、民間信仰への理解であり。地域の「宗教性」への理解である。その理解がはなして「宗教者」や「良き人間」と言われる人であれば誰でも良いかということそうではない。これまでの日本の宗教者、とりわけ多くの僧侶の活動は檀家を対象としたものであったが、東日本大震災により顕在化したのは檀家以外の被災者に対する宗教的ケアに必要性である。それは僧侶（宗教者）にとってアウェイの活動であり、単なる宗教者ではなく、臨床宗教師が必要である。布教でない宗教的ケアの現実が目指されている。

#### 【まとめ】

信仰や宗教は絶対に変化するものではなく、そこにヒトが介在する限り変化し、揺れ動くものである。それぞれの宗派、教団の教義は大事だが、それを信仰する人々の行為や想い、地域性へ寄り添うことが重要である。

宗教者は、自分の信仰があるということがあってはじめて他者の信仰へ寄り添える。宗教者の立ち位置は、自己の信仰の保持と同時に他者の信仰への寄り添いが不可欠である。

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センターリサーチ・アシスタント 大澤絢子